砺波散居村における子どもの遊び空間の世代間変化

－南砺市飛騨屋の事例

大西宏治
（富山大学人文学部）

Ⅰ　はじめに

子どもの遊び空間の世代間変化にはその地域の物理的環境の変化が大きく関わることがこれまでの研究で明らかになっている（寺本・大西、2004）。これまで、都市部では、都市化の進展とともに子どもが遊ぶことができるスペースが減少したこと、さらに、電子ゲームなど屋内遊びの機器が充実したこと、少子社会化により遊び仲間の人数が減少したこと、様々な習い事の登場に子どもの生活時間が多様性に富んだことなどにより、外遊びが大きく減少したことが指摘されている。

そのような中、屋敷林を持つ散村形態の集落が広がる砺波散居村ではどのような時代変化があるのだろうか。そこで、砺波散居村の一部である富山県南砺市飛騨屋地区を事例に、子どもの遊び空間の時代変化を検討した。

南砺市飛騨屋は庄川扇状地を中心とした散居村集落の南東に位置している(図１)。対象地域は 1889 年の町村制の実施によって山野村となり、1954 年には町村合併により井波町となった。さらに 2004 年の市町村合併により現在の南砺市となった。

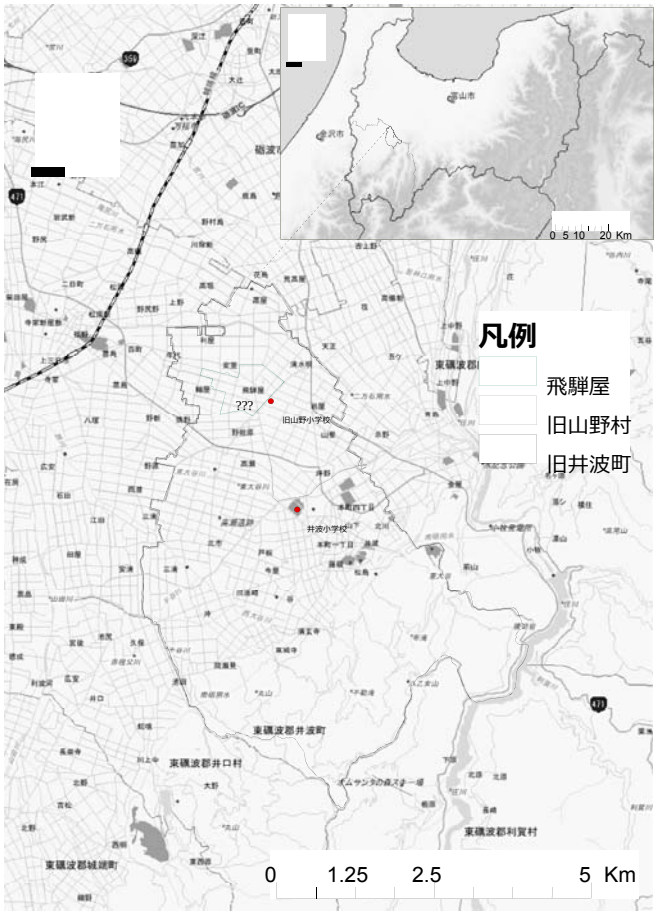


図１　南砺市飛騨屋地区

遊び空間の時代変化を明らかにするために調査地域で子ども時代を過ごした人々へインタビュー調査を実施した。インタビューの際、インフォーマントの子ども時代に近い年代の住宅地図や景観写真などを提示しながら、子ども時代の遊びの様子や生活の様子について質問した。この地域の時代変化の特徴を考慮し、インフォーマントを次のような三世代に区分して議論を進める。1919 年から 1950 年生まれの 55 歳以上の者を「第一世代」、1955 年から 1978 年生まれの 30 歳から 54 歳までの者を「第二世代」、1985 年から 1997 年生まれで 10 歳から 25 歳までの者を「第三世代」とする。

Ⅱ　各世代の子どもの生活空間

（1）第一世代

表１　第１世代の遊び空間

番号	生年	性別	よく遊んだ場所	よく遊んだ遊び	遊んだ仲間
1	1919	男	用水路、神明社、グラウンド	木の実取り、魚釣り、虫取り、かくれんぼ、陣取り、たこ揚げ、竹馬、竹とんぼ、竹鉄砲、弓矢	自治会の友人 4～5 人 (いろいろな年齢)
2	1930	男	神明社、円光寺、グラウンド、自宅	虫取り、かくれんぼ、かけっこ、ゴムとび、縄跳び、ままごと	自治会の仲間 3～6 人 (いろいろな年齢)
3	1931	男	水田、用水路、神明社、友人の家	木登り、魚釣り、おにごっこ、かくれんぼ、陣取り、杉鉄砲、水泳	自治会の友人 5～6 人 (いろいろな年齢)
4	1933	男	水田、用水路、神明社	木の実取り、魚釣り、おにごっこ、かくれんぼ、釘たて、水泳	自治会の友人 4～5 人 (1～2 歳年齢差)
5	1935	男	用水路、神明社、道、自宅の庭、友人の家	魚釣り、輪まわし、陣地とり、竹馬、ターザンごっこ、チャンバラ、パッチン、ビー玉取り、水泳	自治会の友人 4～5 人 (同世代)
6	1936	男	用水路、神明社、グラウンド、自宅の庭	木登り、紙鉄砲、輪まわし、肝試し、釘たて、杉鉄砲、パッチン、水泳、野球	自治会の友人 4～5 人
7	1938	男	水田、用水路、神明社、グラウンド、自宅の庭、友人の家	木登り、かくれんぼ、缶けり、陣取り、肝試し、釘たて、たこ揚げ、野球	自治会の友人 7～10 人
8	1938	女	神明社、グラウンド、自宅の庭	魚釣り、お手玉、缶けり、けんけんぱ、ゴムとび、まりつき	自治会の友人 2～3 人
9	1941	男	水田、用水路、神明社、グラウンド	陣地取り、たこ揚げ、水泳、相撲、野球	自治会の友人 10～15 人 (いろいろな年齢)
10	1946	男	水田、用水路、神明社、グラウンド	木の実取り、陣地取り、肝試し、ターザンごっこ、パッチン、戦争ごっこ、野球	自治会の友人 15～20 人 (異年齢)
11	1947	男	水田、用水路、神明社、道	魚釣り、蛙釣り、輪まわし、肝試し、杉鉄砲、もぐら取り、弓矢、野球	自治会の友人 10 人くらい(年齢の幅が大きい)
12	1947	男	水田、用水路、神明社、グラウンド	木登り、木の実取り、釘たて、杉鉄砲、陣取り、ターザンごっこ、チャンバラ、模型飛行機、水泳、野球	自治会の友人 11 人くらい(年齢の幅が大きい)

13	1947	男	水田、用水路、神明社、グラウンド、友人の家	木登り、木の実取り、釘たて、杉鉄砲、陣取り、ターザンごっこ、チャンバラ、模型飛行機、水泳、野球	自治会の友人 12人くらい(年齢の幅が大きい)
14	1949	男	水田、用水路、神明社、グラウンド	木の実取り、かくれんぼ、陣取り、棒投げ、水泳	自治会の友人(いろいろな年齢)
15	1950	男	水田、用水路、神明社、グラウンド、自宅の庭	木登り、木の実取り、釘たて、杉鉄砲、陣取り、ターザンごっこ、チャンバラ、模型飛行機、水泳、野球	自治会の友人
16	1950	男	水田、用水路、神明社、グラウンド、自宅の庭	木登り、かくれんぼ、ゴム飛行機、缶けり、陣取り、だるまさんがころんだ、パッチン、ビー玉、フラフープ、水泳	自治会の友人 15人くらい
17	1950	男	水田、用水路、神明社、グラウンド	木登り、昆虫採集、紙鉄砲、缶けり、肝試し、釘たて、陣取り、肝試し、杉鉄砲、戦争ごっこ、パッチン、ビー玉、水泳	自治会の友人 10人くらい(年齢の幅が大きい)

聞き取り調査により作成

第一世代では、良く遊んだ場所として用水路が多く挙げられた(表 1)。対象地域内には水田にそって数多くの用水路が流れており、特に南東に隣の集落との間に流れる大小あわせて 4 本の二万石用水は春から秋にかけて子どもたちの格好の遊び場となっていた。4 本の用水路は隣の集落側から順に一番川、二番川、三番川、四番川と呼ばれていた。一番川が最も大きく深い川で年長の子どもたちがよく遊んでいたが、年少の子どもたちは恐くて遊びに行けなかった。年少の子どもたちが良く利用したのは浅くて小さい子どもでも入れる二番川であった。二番川だけは戦後石垣が作られ整備されたが、他の用水は整備されなかった。用水路の間には「くろう」と呼ばれる土手があり、背の高い木や草が生えていてうっそうとしていた。用水路には様々な種類の魚が生息し、手作りの竿で釣りをしたり、手で魚を捕まえたりした。戦時中・戦争直後はタンパク質の不足から用水路で捕えた魚を食べていた。また、夏には用水路に入って水浴び、水泳などをした。時代が進むにつれ、用水路での遊びに関して徐々に大人による監視が厳しくなった。それでも第一世代の子どもたちは用水路で遊ぶことをやめることはなかった。このように子ども達は用水路を遊び場として認識し、大人に禁止されるようになってからも遊び場として活用していた。

用水路以外の遊び場としては水田もあげられた。特に収穫後の秋や冬は水田が広場となり、ボール遊びや雪遊びの場として活用されていた。

他に第一世代全員がよく遊んだ場所として自治会内の神明社を挙げた。神明社は二万石用水の側にあり、冬の積雪する時期を除き、常に子どもたちの遊び空間となっていた。

家にいると農作業や家の手伝いを頼まれるというインフォーマントが多く、子どもたちは学校が終わると家に鞄を置いてすぐに神明社に行った。神明社では、自然に子どもたちが集まっており、たまり場となっていた。神明社では鬼ごっこ、かくれんぼ、缶けり、陣取り、杉鉄砲、竹馬、釘たて、チャンバラ、メンコなどさまざまな遊びが繰り広げられた。

第一世代には自治会単位で行う行事が多くあった。6 月には田祭りがあり、その日のために子どもたちは 1 ヶ月近くかけてデンガク行灯を作った。行灯で自治会内を練り歩いた後、子どもたちだけできもだめしが始まった。第一世代でもきもだめしを行うようになったのはＩ－5 のころからで、それ以前は行われていなかった。10 月には秋祭りが行われ、獅子舞が村内を練りあるいた。夜は映画会や地方演芸団による興行があった。冬の行事としては毎年 1 月 14 日に左義長があり、夜は水田で書初めを燃やした。そして翌日 1 月 15 日は小学生の子どもたちが朝 4 時半ごろに起きて「カモ追い(鳥ボイ)」という五穀豊穣を願う行事を行った。第一世代では遊び以外でも、このような行事に参加することで子どもたちは自治会を濃密に体験していた。

また、大西(1998)の調査にみられるように自治会内の仲間に「縄張り意識」があった。縄張り意識が生じる空間を「エッジ」と呼ぶことにする。ここでもエッジは自治会の境界線となる道路や用水路であった。特に子どもたちがよく遊びに利用した神明社の横を流れる二万石用水は用水路がほぼ一直線で流れており境界として認識されやすかった。子どもたちにとって自治会内は安心できる場所だったが、自治会の外にでるのは怖く、特に子どもだけで出かけるのは心細かった。隣接する岩屋集落に位置する小学校では、どの自治会の子どもたちも遊ぶことができ、自治会の仲間集団同士での争いごとは起きなかった。このように岩屋集落に対しては縄張り意識が強く働いているが、岩屋集落内にある小学校だけはエッジがない特別な場所だった。

(2)第二世代

第二世代では第一世代で報告が多かった用水路での遊泳の報告が減少する(表 2)。1959 年頃から夏休み前に学校職員・ＰＴＡ・警察官が協力して地区内の危険水域に赤旗や水泳禁止標示板が立てられるようになった。1961 年には町営プール、南山見校区、山野小学校区プールができ、子どもたちは夏になると用水路でなくプールで遊泳するようになった。また、1971 年から始まった耕地整理によって用水路に変更が加えられた。用水路の 4 本のうち 1 本が暗渠になり、他の 3 本が 1 つの用水としてまとめられた。なくなった 2 本の用水のあった場所には道路が敷設された。第二世代では、第一世代で遊び場となっていた用水路が大人によって規制されただけでなく、子どもたち自身が用水路を楽しく遊ぶことができる場所として認識しなくなったことで、遊び場としての機能が消失したと言える。

表２　第２位世代の遊び空間

番号	生年	性別	よく遊んだ場所	よく遊んだ遊び	遊んだ仲間
18	1955	男	円光寺、用水路、神明社、自宅の庭	木登り、木の実取り、魚釣り、鬼ごっこ、かくれんぼ、缶けり、杉鉄砲、釘たて、陣取り、パッチ、ボール投げ、水泳	自治会の友人2～5人(ほぼ同じ年齢)
19	1956	男	水田、用水路、神明社、グラウンド、友人の家	魚釣り、虫取り、おにごっこ、かくれんぼ、缶けり、竹鉄砲、たこ揚げ、ボール投げ	自治会の友人5～6人(異年齢)、自治会外の友人数人
20	1969	男	水田、用水路、円光寺、道、友人の家	虫取り、たこ揚げ、秘密基地、ボール遊び、ラジコン、野球	同じ学年の友人 3～5人
21	1971	男	円光寺、グラウンド、空家、自宅、友人の家	魚釣り、虫取り、鬼ごっこ、秘密基地、ボール遊び、ラジコン、野球、サッカー	同じ学年の友人 9 人
22	1977	男	水田、グラウンド、自宅の庭、バス停、友人の家	虫取り、ボール遊び、クラフト飛行機、オオバコ相撲、水遊び	飛騨屋を含む近くの自治会の友人(同世代)
23	1978	男	用水路、神明社、グラウンド、保育所、自宅の庭、友人の家	鬼ごっこ、かくれんぼ、ボール投げ、水遊び、野球、サッカー	同じ学年の友人 3 人

聞き取り調査により作成

次に水田での遊びは第一世代同様に稲作が行われていない時期だけであった。水田ではおにごっこ、たこ揚げ、竹とんぼ、クラフト飛行機などをして遊んだという報告があった。第一世代でよく遊んだ場所に挙げられた神明社だが、第二世代も同様に多くの子どもたちの遊び場となっていた。神明社では、おにごっこ、缶けり、かくれんぼなど、第一世代にあった遊びと同様の遊びをしていたという。1961 年には社務所兼公民館として飛騨屋公民館が建設された。また、耕地整備の後の 1976 年に境内の杉が伐採され玉垣を造成するための財源に充てられた。このときに境内の杉の木はほとんど伐採された。同年に新たに杉の木が植樹されたが、木登りやターザンごっこをしたという報告はこの頃からなくなった。しかしボール遊びなどはここで行われた。神明社は第一世代では子どもたちのたまり場であったが、第二世代では遊び場の 1 つとなった。

第一世代の終わりから田祭やデンガク行燈はしばらく中断されていたが、飛騨屋児童クラブ[13]によって、規模は小さいもののデンガク行灯の村内回りが再び行われるよう

になった。また、獅子舞の行事は踊り手がいないことから第二世代ではしばらく休止し、秋祭りの映画会や地方演芸団の興行も第一世代の終わりからなくなった。

第二世代では小学校の統廃合により、小学校への通学時間は長くなった。それに加えてボーイスカウトや小学校のスポーツ少年団に入っていたというインフォーマントがおり、遊び時間は第一世代に比べると断続的で限られたものになった。また、第一世代にみられたような自治会の集団同士でのけんかがあったという報告はなく、クラスの仲間と自治会外で遊ぶことが多くなり、第一世代にあったような縄張り意識は第二世代では薄れていったと考えられる。

(3)第 3 世代の遊び空間

表３　第 3 世代の遊び空間

番号	生年	性別	よく遊んだ場所	よく遊んだ遊び	遊んだ仲間
24	1985	女	水田、神明社、保育所、自宅の庭、友人の家	虫取り、草花採集、一輪車、鬼ごっこ、かくれんぼ、ゴムとび、ままごと、遊具遊び	自治会の友人 4～5 人 (ほぼ同じ年齢)
25	1986	男	用水路、円光寺、神明社	虫取り、水遊び、おにごっこ、かくれんぼ、缶けり、秘密基地、野球、サッカー	自治会の友人 3 人 (ほぼ同じ年齢)
26	1989	男	用水路、円光寺、神明社、保育所、道、農協倉庫の裏、友人の家	虫取り、エアガン、おにごっこ、かくれんぼ、自転車、ボール遊び、水遊び	自治会の友人 5～6 人 (ほぼ同じ年齢)
27	1996	女	グラウンド、自宅の庭、友人の家	しっぽとり、水泳、バドミントン、テレビゲーム、遊具遊び	同じ学年の友人 3 人
28	1997	女	公園、グラウンド、自宅の庭、祖父母の家	草花採集、猫を追いかける、平均台遊び、水泳、野球、遊具遊び	祖母の家の側(小矢部)の友人 4 人

第三世代では二万石用水での遊びはないものの、水辺の遊びがあった(表 3)。Ｉ－25、Ｉ－26 は兄弟で、2 人だけで遊ぶときに近所の子どもの身体が丁度入る程度の幅の小さな用水路に入り、ウォータースライダーのように流れて遊んだり、用水路をたどって歩いたりして遊んだりカニとりをしたりしたという報告もあった。その他のインフォーマントは用水路で遊んだという報告はなく、夏は町営プールで水泳をする (I－27、I－28)。以上のことから第三世代は第一世代や第二世代と比較すると魚を捕まえたり、釣りをしたりする経験が減少している。

次に、第一世代や第二世代に遊び場となっていた神明社や水田の遊びであるが、Ｉ－

24、Ｉ－25、Ｉ－26 は神明社で遊ぶこともあったが、現在の小学生であるＩ－27、Ｉ－28 は神明社で遊ぶことはない。神社で遊んだことのあるインフォーマントはおにごっこや缶けり、かくれんぼ、陣取り、昆虫採集やＢＢ弾、ゴムとびなどをして遊んだという報告があった。水田の畦道では草花を採集したり、空き地を秘密基地として友達と遊んだりした。

この他には、小学校のグラウンド、自宅の庭や、友人の家などで遊ぶという回答があった。小学校のグラウンドではシーソーやブランコなどの遊具遊びをし、旧山野小学校の跡地にある保育所の広場では、神明社での遊びと同様の遊びや、ジャングルジムやブランコなどの遊具遊び、野球やドッヂボールなどをしたという報告があった。また、保育所には小さな山があり、その山を何度も登り下りするということもしていたということであった。また、第二世代にあたる時期にできた農協倉庫の裏手に機材が山積みになっているところがあり、そこから遊びに使えそうなアイテムを探し、拾ったドラム缶や椅子で秘密基地を作っていたという報告があった。ここは仙田(1992)の言うアナーキースペースといえる。この他に、公園という回答もあった。小学校の帰り道はバスを使わず、歩いて帰り、途中で公園に寄るという。公園では遊具での遊びや、いすに座ってぼーっとするというインフォーマントもいた(I－28)。冬には自宅でゆきだるま作りや雪合戦、屋根雪を使ったスキーをするなどして遊んだ。

次に遊び仲間と遊び時間だが、遊び仲間は 3～6 人の集団で遊んだことが分かる。第三世代ではI－24 からI－26 の世代では自治会内に同級生が多く、自治会内の同級生同士やその兄弟など複数で遊ぶことが多かった。現在対象地域における小学生はインフォーマントの 2 人だけだが、自治会内・自治会外に限らず友人と一緒に遊ぶことはほとんどないということであった。I－28 は小学校の友人を遊びにさそっても、友人が習い事をしていたり家が遠かったりしてなかなか遊べないという報告をしている。

Ⅲ　子どもの日常生活の変化

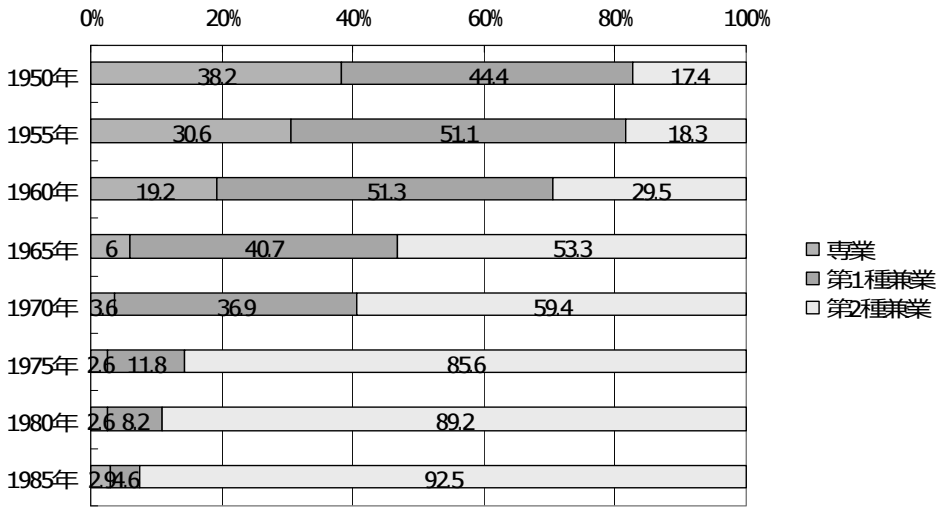
この地域での子どもの日常生活の変化について、インタビュー調査からそのアウトラインをまとめる。

戦後の高度経済成長の影響により、生活の質が変化した。例えば 1960 年には旧山野地区に簡易水道ができ、地域における衛生観念が急速に高まった。また、児童の安全教育の見地から子どもたちの用水路での遊びが問題となり、地区内にプールができてからはプールでの水泳が推奨されるようになった。さらに対象地域ではテレビや冷蔵庫、洗濯機、ステンレス流し台も使用されるようになり 1965 年には電話が山野地区全域に普及する。このように生活水準は向上した。表４に旧井波町における自動車保有台数を示したが、普通車や軽自動車は 1965 年から 1967 年にかけて飛躍的に増加し、対象地域でも全国同様モータリゼーションが進展したことが分かる。また、農業の機械化により余剰能力は農外収入に向けられ、旧井波町では1950年以降兼業農家が激増した(図２)。

表４　自動車保有台数の変化

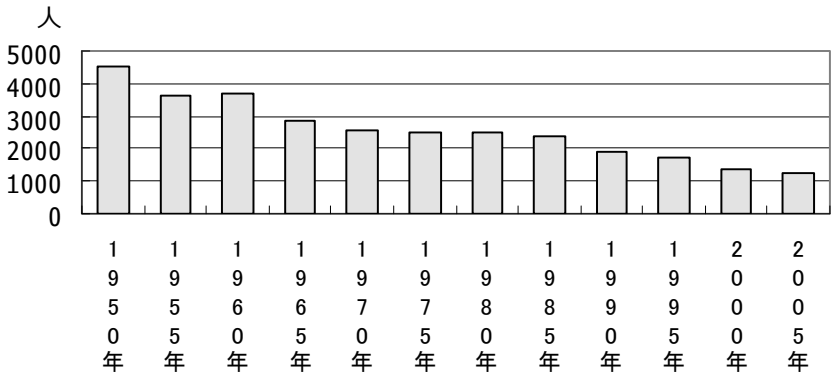
西暦	大型特種	大型自動車	普通車	自動三輪	軽自動車	オートバイ
1965	3	30	206	13	227	1234
1966	5	35	453	10	299	2193
1967	7	37	661	10	414	2544
1968	9	48	733	7	451	2725
1969	9	52	748	6	554	2925

井波町史により作成



井波町史より作成

図２　旧井波町専業・兼業別農家数



国勢調査により作成

図３　旧井波町 15 歳未満人口

第一世代では農作業は機械化が十分には進んでおらず、子どもは農業労働力として重宝されおり、小学校では田植休みが実施されるなど子どもが農業を手伝う必要があった。第二世代からは農業の近代化により機械化が進み図２にみられるように兼業農家が増加した。また、機械化によって子どもたちが農作業を手伝う必要もなくなった。

また、少子化が大きく進んだ。旧井波町に進出した企業は、農業労働力を吸収した。第二次第三次産業の雇用拡大によって、若者は向都離村志向となり、人口の再生産が進まず、若年人口は減少した。旧井波町の 15 歳未満人口をみると、第二世代では第一世代の約 3 分の 2、現代の子供世代では約 4 分の 1 に減少していることがわかる(図３)。このころから第一世代でみられたような年齢の幅がある仲間集団での遊びが縮小し、年齢が比較的近い仲間集団での遊びが増えた。1970 年から子どもたちが新しくできた小学校に通うようになり、子どもたちは自治会内の友人よりもクラスの友人と遊ぶ機会が増加した。このことから昔ながらの遊びは伝承されなくなり、遊びは世代ごとに展開されるようになった。

井波町の構造の物理的な変化が子どもの生活空間にも大きな影響を与えた。飛騨屋集落における耕地整理は 1971 年から 1973 年の間に実施された。耕地整理によって水田や道路、用水路などの整備が進み、散居村特有の屋敷林も漸次伐採されて年々少なくなった。図 13、14 には耕地整理前にあたる 1970 年と耕地整理後にあたる 1977 年の対象地域の様子を示した。耕地整理前は道路の多くが細かく複雑に屈曲しており、耕地整理後は図 14 のように道路が直線的になったことが分かる。耕地の区画は小規模で不規則であったものが、耕地整理後は耕地の区画は均一で大区画になった。また、耕地整理によって二万石用水のあった場所に道路ができ、用水路はコンクリートに変わり遊び場としての機能が消失した。

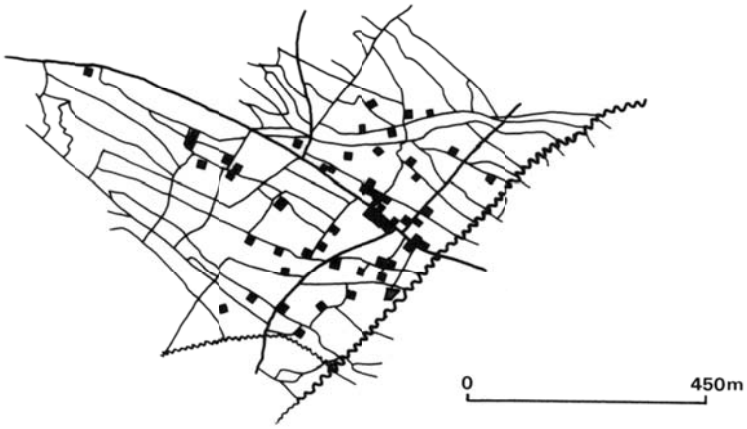


図４　耕地整理前 1970 年の飛騨屋(『山野のあゆみ』空中写真より作成)

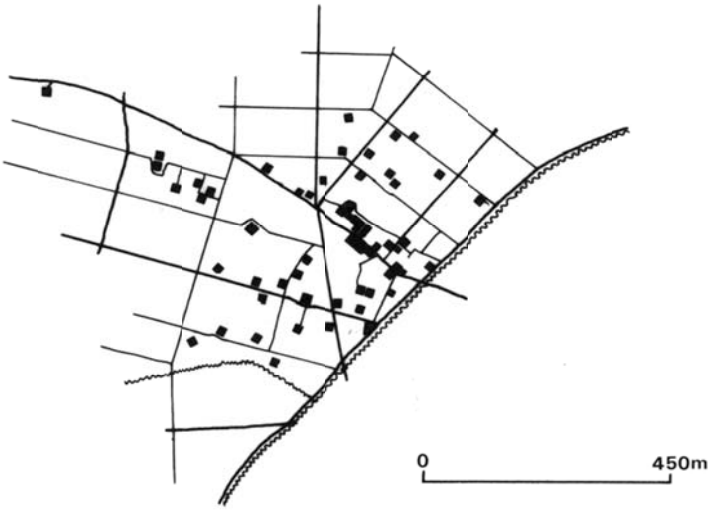


図５　耕地整理後 1977 年の飛騨屋(『山野のあゆみ』空中写真より作成)

Ⅳ　まとめ

遊び空間・遊び時間・遊び仲間の減少に関しては、世代が新しくなるにつれ、子ども達が外遊びのできる空間や継続して遊ぶことのできる自由な時間が減少し、遊び仲間の規模が縮小していることが明らかになった。生活の変化や少子化、耕地整理による遊び空間の消滅などの複合的要因によって遊び空間が縮小した。第一世代では子どもが農作業を手伝うことが多く、子どもの遊び空間が大人の生活との関わりに影響されていたということが散居村における子どもの遊び空間の特徴だといえる。対象地域では耕地整理によってうっそうとした雰囲気がなくなったことで、散居村の特徴的な景観が失われ、また、子どもの自由になる空間が減少したことがわかった。

まだ収集したデータに対しての分析が十分に行われてはいないが、今後、これらのデータに対して慎重に分析を加えていきたいと思う。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、南砺市役所の皆様、インタビュー調査にご協力くださいました飛騨屋の自治会長木澤様ならびに住民の皆様、インタビュー調査に加わっていただいた富山大学人文学部の学生のみなさまに末筆ながら厚く御礼申し上げます。

参考文献

大西宏治　1998. 岐阜県羽島市における子どもの生活空間の世代間変化. 地理学評論 71A : 679 - 701

仙田満　1992.『子どもとあそび』岩波書店.

寺本潔・大西宏治　2004.『子どもの初航海』古今書院.